枇杷園句集

乾

枇杷園士朗先生

叢白集

浪越　朱樹會

士朗先生以刀圭餘暇纂叢
翁之風雲月露無爲能事
生涯常趨紅塵實
不在四窗皆春之先菊
樹一枝赤松數掬比鄰而
同枇杷園孫雨翁一系

陳四綱の孫為政者歟
称張鬼國之人小四郎等
英勢を恐る富士山
猿山新月影外度樹
出て雲を對する四景
暮の如美世賞心殊出

俳諧寄合ノ題ニ其集ニ出ス

文化甲子秋 桂

一句井

枇杷園句集巻之一

春

年内立春

ゆくしみ内よ春ハ来ゆるもまち遠

歳旦

何ごともなくて春迎あしこ弓

元日子白

松ぞまちほけ白ぬ花の春

俺屋しくこうそを風の千変

賀

小しはむや二年くる年の春しき

若葉

老うはむ名の葉をひとのうらびる

古のりうりふこうる

笠ふ人磐のゆもさ家 梅名葉

萩

睦月六日北久ゑれ移村住ふ家を

ゆくに移のを垣引きり毒に笠に

この手き菴あるを春月の西すと

ハへるうきしこうやそ萩を赤

赤半を

世ワすしに萩ちん月と梅

梅

伏山な月白ゥ赤来るうめの花

苔さんぢうす梅をふる日をかうる竜
江の上や二人入〜てをる梅のもと
白梅の大〜きなる中うち
筑州山庵のさび秋枝氏
求よ竜〜てうの名をすて
ゆふ夏をを
弱のいとも香よ白ひるを梅苔
きさとおきう人のもろうめを食

九岳亭

うめうや霧の中まて掃ちきり
神東ふる
貫之のうのまくらそうめの苔
梅うやうけみくを春月花
芭蕉翁肖像開眼
眼も鼻も
ひろ勢めへ　うゑのもし

月前

かゝひさもとの影や苔木のうめの花

暮雨巷法會

苔むしの八うの羅漢の白ひう那

五十八山の巖六十八山の半絵もの

山路大仮ふあれやそろく

まゐる所に素さもるセ

山ふ姫るさ寺あるも梅の下絵ひ

梵

ほゝ小し帰梵寺高し峰の松

梵寺に寺のくるゆふ風のな

仲のしさそ只ゐるのさゝるゆ

小の小庭にゐるの寒り

寺りゝて庭掃のをゝの

告りゝれも

梵寺をゝれも梅ふ頃ゐ

蛍の声 書院の小ちつかれ夏
とこてやらぬ蛍ある三月月

柳

書柳にうき世の垢ハあらう行
伊勢より

書 梅のあめや小あのひとり口

書 柳や暮て帰 淀の犬
矢矧より

書柳の赤ゆ三ハ百里 この那
ゆ草

わしる句ゆ しゆるゆ 塘
震

小ゆのほくゆゆくゆ
古書のさうんなほりぬ朝うんこ
加賀

朝螺貝の初味ゆとる 寒うな

雪

たるの雪ふるのさびしぬ枝もちらし
旅人よ雪ハふまじもまちの宿
出山して
消のこる雪もあるあるゆ供弘
雪間
大佛のあめを見ゆくたる急弘
雪風

明日も有んゆきもあんすもの風
雪風や雪のあたる擔うさ
仰雪
仰雪を出しさあとしらさき
ゆるるや仕ふりと家しうたり
雪月
雪の月雑ゆ雪もるゆ仏きぬ
雪の月松よとゆ雪ゆおろくす

湖月あるをしるうち也其の月

花

としくやなるやとの影一詩

起くるや菊見るやとの栄けり

菊乗るも花と見てこそ目さむれ

所とはふるてはなし

ものもなく庵やさてるさひうて

虎見菴

はくくを見てをれを菊る楊弓

芭蕉堂新成矣

肖像安置しまりて

賜るもうれやあけりの花のみ

贈呉井

ふさはいひくきものよ菊みみ

宇津の山ふる

ふきほとたに花のうみある山路弓

四月廿七日芭蕉翁の京ろを

芳野行

甲子吟に曰ひとりよりみて行ろ
たとりなるにあこと山深く白雲
峰に立ち湘面谷を埋んでれて出
色浅とるる其雨ふも峰歩おほつ
なきを分入るとくくれ
清水のとくくの中を曰ひるるとくくの
ふるに苔ふる花神は清し
芭蕉翁の古ろ再深世をうるも
とのるるひれるを思ひ出るの仏を
さくろふ立ち方はされを点ひ
方に来るも清水をけ今へ分と
歩をまたに常住の月清ろ金

山をくるる清ろく此面り養ふ
清水のやうを曰ひるるとくくの
ふるに苔ふる花神は清し
芭蕉翁の古ろ再深世をうるも
とのるるひれるを思ひ出るの仏を
さくろふ立ち方はされを点ひ
方に来るも清水をけ今へ分と
歩をまたに常住の月清ろ金

いとさみしからぬ屋しき

世を捨てみるあるとく　山路に

さらの

嵐山

松さくら一本置ちりあくし山

花さかりすぎてくいさらぬ嵯峨の宿

ぬきて嵯峨の中きて

清水ふかくとおもふ

木母寺

花の鉢いうなる罪ほろぼらん

年々に花の見やらのかからうり

眉山の花見おもし豊宮崎の文庫

をるとの小に深とる山村の宝

うの神ふる入る山のやとそ

とさへおもふ花の

花の木にむすぶ弟る菴も

帰路

すれのすいひくもとる山頭哉

さくらの土ハ踏峯の土ちやる

踏やらちやもてもうらひゆく

きもとあるあ内さセうる亭所の

神宮うら詣り

焼塩の亭所のさくら

ふうるる

玉垂行

玉垂のやうをみるたちつ風るを鏡

しうる林しきを用ゐる多農

桜ふ情小の山居にむセふるいつれう

林しうさんさんさ所ハ一ゐて

用ハ百千にわうる百千にあうふ人形

多のしうもす況や一ゐあうふ人をや

世のうまうるとう住ふるうや住る人

すやあんちいさき松の菴ホ文机の外
見るものなくかたかたに同じさまし
坐る僧のありくるを茶を奉るいる
なる人なてなら世ものなりとなへとち
見坐るのこなこるものもいをすら
やはりしき標とそこの后は庵りけて
花のもしさもてらも宋ちゆさるや
はてはおのふんるかくゆおはりぬ

はへはかりしゆきとそうるはるた
者なる僧の戸をさしことめさるまそ
はてさまるろ庵りれ日を要発
かなれこるを見るものをお鈴くしく
小倉の山れをとうき木の宿
つそちりにる
鈴庵やおほつるくもはとまた
と口さてさみるれはこの僧のおりうる

菜のよゝ者てこゝの侍るをちはすして
むゝへらし給まるいとゝあはくこゝの毎ち
いつもぬ

涅槃會

あれわとに見つるすゝ子ハ佛ゝ
道人のゝてして申さぬ涅槃像
新買に神ゝくひとをへも祝ゝん載

紫苑

紫の苑よ大名ゝる林麓の事

桂五亭

菜の苑にゝあるよすゝめの柿云
かゝれひゝれとゝ親すゝあゝを
さセるゝきも見ゝす子雀ハ
とんだゝ始ゝる

紫の苑に口ゝしゝあゝの庵雀
梅ゝ肥ゝ菜の苑吸ゝあゝもゝ

籾入

籾入や小さき笊をうちゆるる

帰鳥

三羽二度あそび跡をうしろ了

西湖

はま一度空四よ籾よこの屋る了

然谷よて

ゆるるをしよ入るる然谷豊凡 唐このち

蝶

はまうとすれば蝶伸さ蝶と雲

堂

をみ思こるけ一人形をこ仕り

几巾

風巾ゆるるさ一さ花の様式

蛙

ぶしはせ和ものきを帰蛙

人もふえのハつもふてうの山あゝ

燕

乙女農係よもあらぬ小白うを
塩木ぬむ中を燕の雛来ゝ

雉

かへる来うの峠の焼の雛の寿
ほろ〳〵ハ苔よ雛あく〳〵柏子哉
冨〳〵つ見〳〵てハみあくきて仁哉

幻住菴にて

松ゆゝの雛学へうと菴のあゝ

雛

ひなのかゝる苔のうみゝまとてあゝ
すめるもまふるや雛の膳まつり

桃

伏見ゆと日くれて来うゆゝ

久能山の歳暮

ゆく年を毛ちゝゝるとゆくはるゝ

藤

藤のすゑ枯もあらくもうゝかとあはゝ

寒半日ゝ宋をゆるゝハあるし半日

宋を矣ふされを宋ハゆるゝさるゝ

小原の高よともなひるゝゆの高に

ゆしたうし後世菩提の侍ゝ者

宋をゆるゝに骨をゝゝゝハ宋引ゝ

庵のうちに松の枝折ふるゝ半日

の楽ハ主人もゆるゝしゝ風し遠

豈に琴を弾て月をのゝ友とすと

ゝふゝのわゝさゝゝをへゝ

山藤の枯ゝしゝゝ住居ゝ

題しらず

ゆふはりの雪ふりかゝる春の屋
父母のあるもうを休にをくすめ
美しき砂に小松のみどりかな
月花を折そへる見られけり松の風
花とりやさくらてもかをりそ

善光寺に西行こもりをしたる人の

会傳の春ハやゝ風有あくひとのおひ
半ばとし五明月中に見れハ老さる
ひとり半にるるまたに佛の手をとらも
きゝはなてそとと貝中指不ちれ事る
元の袖ちをらふきしさもなくよろ
かひおくるず群集しるるそかゝけ
なき

朝れ〳〵風掃おそれ堂うち

暮春

あさくさし玉ゆく蔭の門
ゆく末をあすもあすもの日影

椿堂輯

枇杷園句集巻之三

夏

更衣

ふるさとハ父のまの蔭人更衣

老懶

受衣人のきしきにおとろかぬ
和のすがた
和のすがたもしらるる姫ゆふ男うな

時雨

義しきやこるるのみとおれ
ひとすがら思ひ捨てても月花の面
むかふ面ぞ時雨を時雨
住しの橋をうとうるとみとおれ
みたやまの所ハ三ツもあれ時雨

嵯峨提山嵯峨堂より

会佛を米かむやうに ほとおれ

ちるぬ宮ゆ出一ちのみとおれを
大草はの風吹面をこゆひ紅
月弱高ゆ出みるほとおすの
来屋さきしきりとて二三ゆハ
例の瓢携来て松下の陰に蟹の足
ちらちらぬ

追ゆハ誰をやらを行とおれ

名葉

奉さらやいつて之をきらら名葉

れ空廠まうる

れ空前をつくる榊のつう葉哉

茂

うくく水て所の前こむ歳月哉

清佛

尾花ゆう崎をゆきるる月哉

かるはに松ゆくひとの弧弦

ゝて和ゝの上たれ空しゝ

花山堂を住きをへゝう

月はさゝの佛さゝ海まの人月

竹子　蜀年

手ゝみのやて子供魚てこむ寿所

所さた仏子ゝ月ふ月ふ月

伊勢ゝ月はきのふゝ弦ゝう蜀年

牡丹

ちるとみし牡丹つりこむ堀の内

尚茶

五六代尚茶 たくる山あらな

枝子

白きに霧屋もなきしあらな

あるしとうつ又咲あらうの花

苔花

苔花や花咲ぬ庵もちぬ

諫鼓鳥

宋法師まうし奉まし了とも花の中

敷帳

連日のあめ所

日光くるまうる

麻をこしうる

俳ひろやすめあるとく敷屋のか

菅

雪の野や大佛原をゆくみち

粽

此廠やむかしなつかのさと　粽

うゑたいくらもかとくちまき成

五月雨

五月雨のいとひ侍るあき久かな

萱津の里

さみだれやめて屋の場る鳥ゐ

栗手の虎

ひとつ毎つ踏るの白さと月百

竹酔日

竹酔る日もひとのまゐる拍子哉

竹うゑうつまさ拍子うゑと芸なれ

竹なき庭をと人の住居もさ形く俗

ちりぬるいにしへ人のての筆を
さし笑て俄に小さき机を拵へ
におのゝ石なる人こゝにあり常陸なるしく
ぶけうゑに来て良きる帰さ武
まさ岡
郭公鳴さてハみゆくさ風
まさ岡
うゑて去る山田を麻の色うたる

いセ吉兵衛うち茶屋あるふ
田を植ふひとりもうへぬいさらハ
松さのふさ
雨さの垣鳥ゆけハさ田うち
小新
さ田よへハこれ帰れるハてこの門
古井のさと雨こ風こ亭まて
ゆうせし小新の小田ゆふる

蛍狩

蛍狩やうくとをるのホるを
ゆくかな

ゆくかやもモうけ見る老の杖

鵜川

待かねもなくくうるゆく鵜舟
金華山の麓ふ立うす

鵜の灯ほ消うる長夜の灯の百

短夜

みしらぬやく宿屋に泊る蚤の露

夏月

太秦をなく仏たうをなり夏の月

夏の月ぬれとくしくもゆるかな

国扇

先祖ゆ ちうの時分り 古国扇

清水

蟬

蟬の口撥きし蟬なくホケッキョ

蓮

蓮ふるる沙のいろさよ蓮の花

暑

あつき日や小庭のまれに迎ひ火

大蟻のたををあつまりあつまる

峰

乃ちまの撥ふるさぬまの峰

久さち

久さちや乳ぶる火を焚く蟻の穴

涼

あ母　北ちみちのちと栗と繰

ほこりかなまつ月のおもて

檀溪

すゝきに人のすまるす菴ゝ哉

丙午九月六日伊豆谷の
ひまく雪をけを拾原のおく花を
踏しゝ四時のけしきひとゝて
のこるものれし何を別に仙境を
尋るも

ゝゝ志おのゝ多さよ木草の冬ゝ
れ板
南枝しゝるのすゝや花いろ九枝ゝ

宇洋輯